

## 平成以降の中学国語教科書における俳句教材について(1)

入江 昌明

### 一 はじめに

平成に入ってから、中学校の国語教科書は二年、五年、九年、十四年と四度改訂されている。この度五回目の改訂が行われ、平成十八年四月から中学校では新しい国語教科書が使用されることになっている。現在、中学校の国語教科書を出版しているのは、学校図書・教育出版・東京書籍・光村図書・三省堂の五社である。五社のうち学校図書を除く四社は十八年度から小学校の国語教科書と同じ一回り大きい判型を採用しており、中学校の国語教科書も新時代の到来を感じさせるものとなっている。近年、都会においては自然や季節を実感しながら生活することががなくなり、自然・季節を素材とすることの多い俳句教材はますます教えるににくくなっているが、来春から使用される新教科書に俳句教材はどのように扱われているのであろうか。また、出版社によってその扱い方にはどのような違いが認められるのであろうか。小稿はそうした中学校の国語教科書における俳句教材の諸問題を考察する基礎資料として、平成以降に刊行された(含 刊行予定)の五社の国語教科書のうち、学校図書と教育出版の国語教科書に収載された俳句関連の教材を出版社別、年代順に網羅したものである。

### 二 学校図書、教育出版の国語教科書に収載された俳句教材

二社の国語教科書に収載された俳句関連の教材は、各教科書会社の傾向を把握するため出版社別平成十八年度版から平成二年度版まで順次遡る形で掲出した。また、取り上げる内容その他に関しては以下の要領に従った。

- ※ 作者名や俳句中の漢字、歴史的仮名遣い等に施されたルビは、煩を避けて省略に従った。
- ※ 出版社によっては川柳を収載するが、川柳も同じ詩型ということで俳句教材として取り上げた。
- ※ 俳句の創作に欠かせない歳時記などについて言及したのも俳句教材として取り上げた。
- ※ どの出版社も古文の教材として収載する『おくのほそ道』については、作品中に俳句が含まれているので俳句教材として扱った。
- ※ 俳句教材以外の教材中に俳句や川柳が載っている場合も、一応参考として取り上げた。

なお、俳句の指導は短歌の指導とも関わりところがあるので本来なら短歌も同時に取り上げるべきであるが、俳句と短歌を併せると相当量に

達するので、短歌については次回に回すこととした。

**学校図書**

平成十八年度版教科書

『中学校 国語3』

2 命の共鳴

「俳句」(小林恭二『俳句という愉しみ』の一部を引用した俳句の解説文)(五六頁〜五七頁)に、次の句を掲出する。

凍蝶になほ大いなる凍降りぬ

藤田湘子

「俳句十五句」(五八頁〜六〇頁)に、以下の十五句を収載する。

風景

春風や闘志いだきて丘に立つ

高浜虚子

滝落ちて群青世界とどろけり

水原秋桜子

分け入つても分け入つても青い山

種田山頭火

花

つきぬけて天上の紺曼珠沙華

山口誓子

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉

三橋鷹女

生き物

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる

加藤楸邨

冬蜂の死にどころなく歩きけり

村上鬼城

木の揺れが魚に移れり半夏生

大木あまり

愛

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

子の髪の毛に流るる五月来ぬ

大野林火

きみ嫁けり遠き一つの計に似たり

高柳重信

別なひと見てゐる彼のサングラス

黛まどか

命

捕虜冷えぬ五体の火種皆絶えて

鈴木ゆすら

戦歿の友のみ若し霜柱

三橋敏雄

4 今に向かって

「言葉が見た風景——おくのほそ道

松尾芭蕉」(二六六頁〜一七

三頁)に、本文・解説文と共に以下の九句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

行く春や鳥啼き魚の目は泪

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

五月雨の降りのこしてや光堂

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天の河

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

「おくのほそ道の道のりと句」(一七〇頁)に、前掲の「行く春や」

「夏草や」「閑かさや」「五月雨を」「荒海や」「蛤の」の六句と共に以下の十九句を掲出する。

暫時は滝に籠るや夏の初め

夏山に足駄を拝む首途かな

卯の花をかざしに閑の晴れ着かな (曾良)

世の人の見付けぬ花や軒の栗

早苗とる手もとや昔しのぶ摺り

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

松島や鶴に身をかれほととぎす

夏草や兵どもが夢の跡

蚤虱馬の尿する枕もと

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩れて月の山

象潟や雨に西施がねぶの花

一つ家に遊女もねたり萩と月

わせの香や分け入る右は有磯海

塚も動け我が泣く声は秋の風

しほらしき名や小松吹く萩すすき

行き行きてたふれ伏すとも萩の原

寂しさや須磨にかちたる浜の秋

月清し遊行のもてる砂の上

注 「卯の花を」の句の作者名を括弧に入れているのは、教科書には曾良の名

が抜け落ちているためである。

平成十四年度版教科書

『中学校国語2』

5 文化 時の中で

『文字の学習室④ 熟語の読み方』(一八〇頁～一八二頁)に、「熟字訓」の例として次の古川柳を掲出する。

同じ字を 雨雨雨と 雨て読み

『中学校国語3』

3 自然 命の共鳴

「俳句」(小林恭二『俳句という愉しみ』の一部を引用した俳句の解説文)(四二頁～四三頁)に、次の句を掲出する。

凍蝶になほ大いなる凍降りぬ

藤田湘子

「俳句十五句」(四四頁～四六頁)に、以下の十五句を収載する。

風景と心

春風や闘志いだきて丘に立つ

高浜虚子

滝落ちて群青世界とどろけり

水原秋桜子

分け入つても分け入つても青い山

種田山頭火

花と心

つきぬけて天上の紺曼珠沙華

山口誓子

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉  
生き物と心

三橋鷹女

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる  
冬蜂の死にどころなく歩きけり  
木の揺れが魚に移れり半夏生

加藤楸邨  
村上鬼城  
大木あまり

愛を託す

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

子の髪に風流るる五月来ぬ

大野林火

きみ嫁けり遠き一つの計に似たり

高柳重信

状況と命

捕虜冷えぬ五体の火種皆絶えて

鈴木ゆすら

戦歿の友のみ若し霜柱

三橋敏雄

献体を約して荒地たがやせり

中岡草人

## 5 文化 歴史 今に向かって

「言葉が見た風景——おくのほそ道 松尾芭蕉」(一四七頁)一五三頁)に、本文・解説文と共に以下の九句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

行く春や鳥啼き魚の目は泪

夏草や兵どもが夢の跡

卵の花に兼房見ゆる白毛かな

五月雨の降りのこしてや光堂

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

曾良

五月雨をあつめて早し最上川  
荒海や佐渡によこたふ天の河  
蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

「おくのほそ道の道のりと句」(二五二頁)に、前掲の「行く春や」  
「夏草や」「閑かさや」「五月雨を」「荒海や」「蛤の」の六句と共に以下  
の十八句を掲出する。

暫時は滝に籠るや夏の初め  
夏山に足駄を拝む首途かな

卯の花をかざしに関の晴れ着かな (曾良)

世の人の見付けぬ花や軒の栗

早苗とる手もとや昔しのぶ摺り

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

松島や鶴に身をかれほととぎす

夏草や兵どもが夢の跡

蚤虱馬の尿する枕もと

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩れて月の山

象瀉や雨に西施がねぶの花

一つ家に遊女もねたり萩と月

わせの香や分け入る右は有磯海

塚も動け我が泣く声は秋の風

しほらしき名や小松吹く萩すすき

曾良

行き行きてたふれ伏すとも萩の原 曾良

寂しさや須磨にかちたる浜の秋

月清し遊行のもてる砂の上

注 「卯の花を」の句の作者名を括弧に入れているのは、教科書には曾良の名が抜け落ちているためである。

### 平成九年度版教科書

#### 『中学校国語2』

#### 5 自己をとらえる

「◆文字の学習室」(二三四頁)に、「熟字訓」の例として次の古川柳を掲出する。

同じ字を 雨雨雨と雨て読み

#### 『中学校国語3』

#### 2 環境と人間

「俳句を味わう」(四八頁〜五一頁)に、俳句の簡単な解説と以下の五句の鑑賞文、更に鑑賞文中に一茶の句二句と尾崎放哉の句一句を掲出する。

夏河を越すうれしさよ手に草履

やれ打つな蠅が手を摺り足をす

いくたびも雪の深さを尋ねけり

外にも出よ触るるばかりに春の月

こんなよい月を一人で見て寝る

与謝蕪村

小林一茶

正岡子規

中村汀女

尾崎放哉

雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

瘦蛙まけるな一茶是に有り

咳をしてもひとり

#### 2 環境と人間

「馬酔草咲く——ほか八句」(五二頁〜五五頁)に、以下の九句を収載する。

来しかたや馬酔草咲く野の日のひかり

バスを待ち大路の春をうたがはず

白牡丹といふといへども紅ほのか

分け入つても分け入つても青い山

蟋蟀は少女の指にやはらかき

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

星空へ店より林檎あふれをり

行く馬の背の冬日差はこぼるる

かなしめば鴟金色の日を負ひ来

小林一茶

小林一茶

尾崎放哉

水原秋桜子

石田波郷

高浜虚子

種田山頭火

山口誓子

飯田蛇笏

橋本多佳子

中村草田男

加藤楸邨

(参考)(五五頁)に、「川柳」の簡単な解説と次の古川柳三句を掲出

する。

寝てゐてもうちはの動く親心

是小判たつたひと晩居てくれろ

雷をまねて腹掛けやつとさせ

## 4 文化と伝統

「おくのほそ道 松尾芭蕉」(一八四頁～一九一頁)に、本文・解説文と共に以下の九句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

行く春や鳥啼き魚の目は泪

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

五月雨の降りのこしてや光堂

閑かさや岩にしみ入る蟬の声 (立石寺)

五月雨をあつめて早し最上川 (最上川)

荒海や佐渡によこたふ天の河 (越後)

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

## 4 文化と伝統

『まあまあ』にみる日本人の心 森本哲郎 (二〇〇頁～二一〇頁)

に、一茶の次の句を掲出する。

是がまあつひの栖か雪五尺

平成五年度版教科書

『中学校国語3』

## 2 自然と共に生きる

「俳句を味わう」(五八頁～六一頁)に、俳句の簡単な解説と以下の五句の鑑賞文、更に鑑賞文中に一茶の句二句と尾崎放哉の句一句を掲出

する。

夏河を越すうれしさよ手に草履

与謝蕪村

やれ打つな蠅が手を摺り足をする

小林一茶

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

外にも出よ触るるばかりに春の月

中村汀女

こんなよい月を一人で見て寝る

尾崎放哉

雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

小林一茶

瘦蛙まけるな一茶是に有り

小林一茶

咳をしてもひとり

尾崎放哉

「春風や——ほか八句」(六二頁～六五頁)に、以下の九句を収載する。

春風や鬪志いだきて丘に立つ

高浜虚子

バスを待ち大路の春をうたがはず

石田波郷

分け入つても分け入つても青い山

種田山頭火

蟻蛸は少女の指にやはらかき

山口誓子

をりとりてはらりとおもきすすきかな

飯田蛇笏

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

水原秋桜子

星空へ店より林檎あふれをり

橋本多佳子

冬の水一枝の影もあざむかず

中村草田男

かなしめば鴟金色の日を負ひ来

加藤楸邨

(参考) (六五頁) に、「川柳」の簡単な解説と次の古川柳三句を掲出する。

寝てゐてもうちはの動く親心  
是小判たつたひと晩居てくれる  
雷をまねて腹掛けやつとさせ

#### 4 文化を創造する

「おくのほそ道 松尾芭蕉」(一八六頁〜一九三頁) に、本文・解説文と共に以下の九句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家  
行く春や鳥啼き魚の目は泪

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

五月雨の降りのこしてや光堂

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天の河

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

#### 平成二年度版教科書

##### 『中学校国語3』

##### 5 想像を豊かに

「俳句を味わう」(一三八頁〜一四二頁) に、俳句の簡単な解説と以

下の五句の鑑賞文、更に鑑賞文中に一茶の句二句と尾崎放哉の句一句を掲出する。

夏河を越すうれしさよ手に草履  
やれうつな蠅が手をすり足をする  
いくたびも雪の深さを尋ねけり

与謝蕪村  
小林一茶

外にも出よ触るるばかりに春の月  
こんなよい月を一人で見て寝る

正岡子規  
中村汀女  
尾崎放哉

雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

小林一茶

やせ蛙負けるな一茶是に有り

小林一茶

咳をしてもひとり

尾崎放哉

「春風や——ほか八句」(一四二頁〜一四四頁) に、以下の九句を収載する。

春風や鬨志いだきて丘に立つ

高浜虚子

まさをなる空よりしだれ桜かな

富安風生

プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ

石田波郷

しづかなる力満ちゆき蟻蛸とぶ

加藤楸邨

をりとりてはらりとおもきすすきかな

飯田蛇笏

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

水原秋桜子

曳かれる牛が辻ですつと見廻した秋空だ

河東碧梧桐

海に出て木枯帰るところなし

山口誓子

冬の水一枝の影もあざむかず

中村草田男

〔参考〕（一四四頁）に、「川柳」の簡単な解説と次の古川柳三句を掲出する。

寝てゐてもうちはの動く親心  
是小判たつたひと晩居てくれる  
雷をまねて腹掛けやつとさせ

## 6 古典を味わう

「おくのほそ道 松尾芭蕉」（一六八頁～一七五頁）に、本文の一部と以下の八句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家  
行く春や鳥啼き魚の目は泪

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天の河

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

曾良

「古典のとびら（川柳・説話・故事成語）」（一六頁～二三頁）に、以下の古川柳四句を収載する。

本ぶりになつて出てゆく雨やどり  
寝てゐても団扇のうごく親心  
逃げしなに覚えて居ろは負けたやつ  
その後はこはごは翁竹を割り

## 『伝え合う言葉 中学国語3』

読む《言葉を深める》

「言葉を読み継ぐ（おくのほそ道）」（一六頁～二五頁）の本文中に、次の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

夏草や兵どもが夢の跡

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

『おくのほそ道』の足跡図（一七頁）に、以下の七句を収載する。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

あらたふと青葉若葉の日の光

田一枚植ゑて立ち去る柳かな

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天河

あかあかと日はつれなくも秋の風

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

## 教育出版

平成十八年度版教科書

『伝え合う言葉 中学国語1』

読む《言葉と出会う》



読む《言葉を探る》

「近代の俳句」(五六頁〜五九頁)に、以下の十四句を収載する。

春の句

春浅き水を渡るや鷺一つ

河東碧梧桐

春風や闘志いだきて丘にたつ

高浜虚子

ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな

村上鬼城

夏の句

雨がちに端午ちかづく父子かな

石田波郷

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

岩に爪たてて空蟬泥まみれ

西東三鬼

秋の句

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

水原秋櫻子

金剛の露ひとつぶや石の上

川端茅舎

秋刀魚焼く句の底へ日は落ちぬ

加藤楸邨

冬の句

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

咳の子のなぞなぞ遊びきりもなや

中村汀女

真つ白き障子の中に春を待つ

松本たかし

\* \*

夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ

種田山頭火

こんなよい月を一人で見て寝る

尾崎放哉

「俳句」と「季語」に関する簡単な解説文(五八頁)中に、前掲の三句以外に「二句切れ」の例として次の句を収載する。

眼にあてて海が透くなり／桜貝 松本たかし

平成十四年度版教科書

『伝え合う言葉 中学国語1』

4 古典にふれる

「伝統の中から——いろはがた・川柳・狂言」(一三〇頁〜一四一頁)に、以下の古川柳四句を収載する。

本ぶりになつて出てゆく雨やどり

寝てゐても団扇のうごく親心

逃げしなに覚えて居ろは負けたやつ

その後はこはごは翁竹を割り

『伝え合う言葉 中学国語3』

① 表現の魅力

「近代の俳句」(二八頁〜二九頁)に、以下の十四句を収載する。

花の句——春

ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな

村上鬼城

赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐

映りたるつつじに緋鯉現れし

高浜虚子

水の句——夏

山清水ささやくまに聞入りぬ

松本たかし

諸手さし入れ泉にうなづき水握る  
噴水のしぶけり四方に風の街

中村草田男  
石田波郷

鳥の句——秋

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々  
燕はや歸りて山河音もなし  
小鳥来て何やら楽しもの忘れ

水原秋櫻子  
加藤楸邨  
星野立子

雪の句——冬

いくたびも雪の深さを尋ねけり  
風雪にたわむアンテナの声を聴く  
靴紐をむすぶ間も来る雪つぶて

正岡子規  
山口誓子  
中村汀女

旅の句

夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ  
こんなよい月を一人で見て寝る

種田山頭火  
尾崎放哉

「俳句の楽しさ 坪内稔典」(三〇頁〜三五頁)の文章中に、作者の句八句を収載する。

河馬になる老人が好き秋日和  
桜散るあなたも河馬になりなさい  
水中の河馬が燃えます牡丹雪  
三月の甘納豆のうふふふふ  
一月の甘納豆はやせてます  
二月には甘納豆と坂下る  
河馬を呼ぶ十一月の甘納豆

十二月どうするどうする甘納豆

4 古典を味わう

『おくのほそ道 芭蕉』(二四四頁〜一五三頁)に、本文と共に以下の二句を収載する。  
夏草や兵どもが夢の跡  
閑かさや岩にしみ入る蟬の声

「おくのほそ道旅程図」(二四六頁)に、以下の七句を収載する。

行く春や鳥啼き魚の目は泪  
あらたふと青葉若葉の日の光  
田一枚植ゑて立ち去る柳かな  
五月雨をあつめて早し最上川  
荒海や佐渡によこたふ天河  
あかあかと日はつれなくも秋の風  
蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

平成九年度版教科書

『中学国語①』

4 古典のとびら

「民衆の中から」(二三八頁〜一四八頁)に、川柳に関する簡単な解説と古川柳四句を収載する。  
逃げしなに覚えて居ろは負けたやつ

いりもせぬ物の値をきく雨やどり  
これ小判たつたひと晩居てくれろ  
その後はこはごは翁竹を割り

## 6 生活の中で

「表現」「身のまわりを見つめて」(二〇二頁～二二四頁)に、「端居  
富田菜緒子」(生徒作品)を収載するが、その中に以下の二句が載る。  
端居して孫と宇宙の話など  
端居して祖母と私は語り合おう

## 『中学国語③』

### 1 表現の豊かさ

「近代の俳句」(二二五頁～三三三頁)の「1 俳句の楽しさ 坪内稔  
典」(二二五頁～二九頁)の文章中に、作者の句八句を収載する。

河馬になる老人が好き秋日和  
桜散るあなたも河馬になりなさい  
水中の河馬が燃えます牡丹雪  
三月の甘納豆のうふふふふ  
一月の甘納豆はやせてます  
二月には甘納豆と坂下る  
河馬を呼ぶ十一月の甘納豆  
十二月どうするどうする甘納豆

「二 四季の句」(三〇頁～三三三頁)に、以下の十四句を収載する。

### 花の句——春

ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな  
赤い椿白い椿と落ちにけり  
映りたるつつじに緋鯉現れし  
村上鬼城  
河東碧梧桐  
高浜虚子

### 水の句——夏

山清水ささやくまに聞入りぬ  
諸手さし入れ泉にうなぎ水握る  
噴水のしぶけり四方に風の街  
松本たかし  
中村草田男  
石田波郷

### 鳥の句——秋

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々  
燕はや帰りに山河音もなし  
小鳥来て何やら楽しもの忘れ  
水原秋櫻子  
加藤楸邨  
星野立子

### 雪の句——冬

いくたびも雪の深さを尋ねけり  
風雪にたわむアンテナの声を聴く  
靴紐をむすぶ間も来る雪つぶて  
正岡子規  
山口誓子  
中村汀女

### 旅の句

夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ  
こんなよい月を一人で見て寝る  
種田山頭火  
尾崎放哉

## 4 古典を味わう

「おくのほそ道 芭蕉」(二六六頁～二七一頁)に、本文と共に以

下の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

夏草や兵どもが夢の跡

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

「おくのほそ道旅程図」(二七〇頁)に、以下の六句を収載する。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

あらたふと青葉若葉の日の光

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天河

あかあかと日はつれなくも秋の風

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

平成五年度版教科書

『新編 中学国語Ⅰ』

2 想像の楽しさ

「表現」「感動を生き生きと」(五六頁～六二頁)に、「端居 富田 菜緒子」(生徒作品)を収載するが、その中に以下の二句が載る。

端居して孫と宇宙の話など

端居して祖母と私は語り合う

5 古典のとびら

「民衆の中から」(一四〇頁～一四八頁)に、川柳に関する簡単な解

説と古川柳五句を収載する。

通り抜け無用で通り抜けが知れ

はへば立て立てばあゆめの親心

本ぶりになつて出てゆく雨やどり

これ小判たつたひと晩居てくれる

武蔵坊とかく支度に手間がとれ

『新編 中学国語3』

2 表現の力

「近代の俳句」(二四頁～二八頁)の「一 俳句の楽しさ 坪内稔典」(二五頁～二八頁)の文章中に、作者の句八句を収載する。

河馬になる老人が好き秋日和

桜散るあなたも河馬になりなさい

水中の河馬が燃えます牡丹雪

三月の甘納豆のうふふふ

一月の甘納豆はやせてます

二月には甘納豆と坂下る

河馬を呼ぶ十一月の甘納豆

十二月どうするどうする甘納豆

「二 四季の句」(二九頁～三二頁)に、以下の十四句を収載する。

花——春

赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐

花散るや耳ふつて馬のおとなしき  
映りたるつつじに緋鯉現れし

村上鬼城  
高浜虚子

水——夏

山清水ささやくまに聞入りぬ  
諸手さし入れ泉にうなぎ水握る  
噴水のしぶけり四方に風の街

松本たかし  
中村草田男  
石田波郷

鳥——秋

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々  
燕はや帰りて山河音もなし  
小鳥来て何やら楽しもの忘れ

水原秋桜子  
加藤楸邨  
星野立子

雪——冬

いくたびも雪の深さを尋ねけり  
風雪にたわむアンテナの声を聴く  
靴紐をむすぶ間も来る雪つぶて

正岡子規  
山口誓子  
中村汀女

旅の句

夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ  
こんなよい月を一人で見て寝る

種田山頭火  
尾崎放哉

5 古典に学ぶ

『おくのほそ道』（一八六頁～一九一頁）に、本文と共に以下の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家  
夏草や兵どもが夢の跡

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

「おくのほそ道旅程図」（一九〇頁）に、以下の六句を収載する。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

あらたふと青葉若葉の日の光

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天河

あかあかと日はつれなくも秋の風

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

平成二年度版教科書

『新版 中学国語1』

6 古典のとびら

「民衆の中から〔笑い話・川柳・ことわざ〕」（一八六頁～一九三頁）に、川柳に関する簡単な解説と古川柳五句を収載する。

通り抜け無用で通り抜けが知れ

本降りになつて出てゆく雨やどり

寝てゐてもうちはのうごく親心

武蔵坊とかく支度に手間がとれ

これ小判たつたひと晩居てくれろ

『新版 中学国語3』

2 表現の魅力

「雪残る——近代の俳句」(二八頁〜三二頁)に、以下の十六句を収載する。

雪残る頂一つ国境

正岡子規

夏嵐机上の白紙飛び尽くす

下の三句を収載する。

いくたびも雪の深さを尋ねけり

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

春風や闘志いだきて丘に立つ

高浜虚子

金龜子擲つ闇の深さかな

夏草や兵どもが夢の跡  
閑かさや岩にしみ入る蟬の声

桐一葉日当りながら落ちにけり

春

中村汀女

春暁や水ほとばしり瓦斯燃ゆる

石田波郷

バスを待ち大路の春をうたがはず

夏

中村草田男

万緑の中や吾子の齒生え初むる

山口誓子

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る

秋

飯田蛇笏

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

啄木鳥や落ち葉をいそぐ牧の木々

水原秋桜子

冬

加藤楸邨

寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃

橋本多佳子

暖炉もえ末子は父のひざにある

◇

分け入つても分け入つても青い山

種田山頭火

せきをしてもひとり

尾崎放哉

## 6 古典に学ぶ

「おくのほそ道

芭蕉」(二八六頁〜二九二頁)に、本文と共に以

下の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

夏草や兵どもが夢の跡

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

「おくのほそ道旅程図」(一九〇頁)に、以下の六句を収載する。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

あらたふと青葉若葉の日の光

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天河

あかあかと日はつれなくも秋の風

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ